終い支度

「謝らんといかんことがあるんよ、お母さん長生きしそう」

ある日、突然母がこう言った。

「家系やもんねぇ、仲ようせんといかんね」

冗談混じりの妙な返事をしたように思うが、真っ当な答えだったと思うことにしている。あれから五年。八十一歳になった母は、元気に暮らしている。

カタカタと足踏みミシンを響かせ、なにやら作っている母。ここ数年で、身近な人を立て続けに見送っていた。どうしても残りの時間を考える。動けるうちに家の中を片づけてしまいたい。まずは、なんとかしたいモノの一つである着物を、一枚選んで解き作務衣にした。片づけの時に丁度いい。昔から格好から入る癖は変わらない。母の終い支度が始まった。

離婚して、祖母を看取り、ここでの暮らしは四十年を過ぎた。私が家を出てからはずっと一人の小さな暮らしをしている。親戚や友達が集まるのはいつも実家になるので、泊まれるようにたくさん布団があり、お鍋や大皿も大層すぎるほどある。「もったいない」「いつか使う」の壁を乗り越えることができず今日に至る。そんな出番待ちのモノたちも、実家に戻るたびに少しづつ姿を消していく。訪ねてくる人が居ないとなると、いよいよお役御免だ。

コツコツ片づけを進めてガランとなった食器棚からグラスを取るときに、片づけが終わったら母も居なくなるような、そんな寂しさを、ふと感じてしまった。片づけるということは、心の中も強烈に揺さぶってくる。母は大丈夫だろうか？　年寄り扱いも嫌がるから「無理せんときよ」とだけ声をかける。「うん、大丈夫」といつもの返事が返ってきた。

夏の初め頃、「最近思うように動けんのよ」とポツリ。片づけたいけど、身体が付いてこない。母の弱音を聞いたのは初めてだった。片づけたいのは、負担をかけないようにしておこうという思いやりだとわかっていた。ただ、八十を越えた母には家の様子が変わっていくのは、やっぱり負担がかかり過ぎているようだ。ガランとした食器棚に感じたのは、母の寂しさでもあった。「ゆっくりでいいいやん、長生きすることやし」「あぁ、そうやった」と作務衣姿で母は笑った。少し背中が丸くなっていたことに気がついた。

母は香川県から二十歳で大阪に出てきた。洋裁で生計を立て、ウエディングドレスが縫えるようになった頃、夫の仕事を手伝うために心を残したまま洋裁から離れた。紆余曲折あった人生の最終で、再び洋裁に戻って来た。

「ミシンの片づけはアンタがして…これはどうしても捨てれんの」

カタカタと軽快な音を響かせながらそう言った。

私がするよ。あなたの娘だもの。今楽しめることに元気を使って。それがあなたの終い支度なのだから。

ミシンの音が子守唄がわりだった